

マーラー：交響曲第9番 二長調

《交響曲第9番》は、グスタフ・マーラー（1860-1911）が完成させた最後の交響曲である。マーラーの晩年—といっても50代初めという若さで亡くなったのだが—、とくに1907年以降、彼をとりまく状況は暗転していた。1つ目の悲劇は、ウィーン宮廷歌劇場の音楽監督だった彼が辞任に追い込まれたことである。これはマーラーが自作を指揮するためにウィーンを留守にしがちだったことから、ジャーナリズムが猛烈な反マーラー・キャンペーンを開始したことなどによるものだった。

2つ目の悲劇は、1907年の夏、長女のマリア・アンナが猩紅熱とジフテリアを併発して4歳8ヶ月で亡くなったことである。この3年前に《亡き子をしのぶ歌》を作曲していたマーラーは、偶然とはいえ、悲しい運命を予告するような作品を書いたことで余計に苦しんだ。マーラーは愛娘との思い出が詰まったオーストリア南部のマイエルニヒの作曲小屋に戻ることができず、1908年に南チロルのトープラッハに仕事場を移している。そして3つ目の悲劇が、自身の心臓病の発覚である。妻アルマの回想によれば、散歩をする時も、歩数計をポケットに入れて歩数と脈を数えながら歩いたという。

度重なる悲劇にじっと耐え忍びながら、マーラーは1908年にニューヨークのメトロポリタン歌劇場でヴァーグナーの楽劇《トリスタンとイゾルデ》を指揮してアメリカ・デビューを果たした後、ニューヨーク・フィルの音楽監督となる。指揮活動に明け暮れながら、夏の休暇にはトープラッハに戻って作曲に集中した。

《交響曲第9番》は1909年夏に、トープラッハで作曲が開始された。声楽付きの交響曲《大地の歌》がまもなく完成という時で、《第9番》は完成されないままニューヨークに持ち帰られた。マーラーは秋から年末までに約40回のコンサートをこなしながら作曲を進め、1910年4月1日に《第9番》は完成した。

初演は1912年6月26日、ウィーンで、マーラーの弟子で友人だったブルーノ・ワルター（1876-1962）の指揮、ウィーン・フィルの演奏により行われた。マーラーがこの世を去った後のことである。

《交響曲第9番》は、別離や死を身近なものとしたマーラー晩年の心境を反映した作品である。生きることへの激しい欲求と、死への予感とが交替しながら、やがてすべてが浄化されていくプロセスを描いたものと解釈されることも多い。

第1楽章 アンダンテ・コモド

冒頭のチェロとホルンによるリズム主題、ハーブの短い旋律（ファ#・ラ・シ・ラ）、それに答えるホルン（ベルの部分に手を入れて吹くゲシュトツト奏法による音色）の短い旋律、第2ヴァイオリンが奏する「ファ#・ミー、ファ#・ミー」という2度下行による主題の開始。冒頭わずか数小節に現れるこれらの素材が、楽章全体を支配している。なお、この2度下降は古くから「ため息の音型」と言われるもので、《大地の歌》の終曲〈告别〉では「永遠に」という歌詞が付いていた。音楽はいくども激しく苦闘するが、最後は穏やかに終わる。

第2楽章 緩やかなレントラーのテンポで、やや無骨で粗野に

3種類の舞曲が交替する。現世での喜びを皮肉ったようにも取れるユーモラスな音楽である。途中で、第1楽章の「2度下降」も聞こえてくる。

第3楽章 ロンド・ブルスケ：アレグロ・アッサイ、きわめて反抗的に

「ブルスケ」は「ふざけた」、「いたずらっぽい」といった意味である。闘争的な音楽だが、パロディ風の皮肉も感じられる。きわめて対位法的な書法はフーガへと発展する。

第4楽章 アダージョ：きわめてゆっくりと、抑制して

死と浄化の楽章とも言われる。死との闘いを終えて、穏やかな境地に達したかのような音楽である。変奏の手法が取られており、《亡き子をしのぶ歌》の第4曲〈子供たちはちょっと遠くに出かけただけだ〉の旋律などが引用されている。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成：ピッコロ、フルート4、オーボエ4（イングリッシュホルン持ち替え1）、
E♭クラリネット、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット4（コントラファゴット持ち替え1）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ2、スネアドラム、バスドラム、シンバル、トライアングル、タムタム、グロッケンシュピール、鐘3、ハープ、弦五部

※スコア上の表記